尾坂徳司著

中国新文学運動史（正）

―政治と文学の交点・胡適から魯迅へ―

法政大学出版局

著者略歴

一九二〇年　東京に生まれる
一九四三年　北京大学文学院卒業
現在　法政大学教授
著書　『丁玲入門』
『中国新文学運動史(続)』
訳書　茅盾『真夜中』『茅盾作品集』
『丁玲作品集』など
現住所　東京都武蔵野市吉祥寺南町
四―十五―十三

中国新文学運動史（正）
――政治と文学の交点・胡適から魯迅へ――

1957年11月 5 日 初版第1刷発行　定価1200円
1971年3月 25 日　第4刷発行

著者　尾坂徳司
発行者　相島敏夫

発行所　法政大学出版局
東京都港区南麻布2―8―4　振替・東京95814

1098-90021-7710　三和印刷・市川製本

まえがき

中国文学を新文学と旧文学とにわける場合、五・四運動以後の文学を新文学、それ以前の文学を旧文学とするのが一般である。

なぜ五・四運動を新旧両文学の境界線にするかというと、五・四運動を境にして、中国思想界の指導原理が、封建主義から民主主義にうつり、文学もそのために、思想内容を一変したからである。旧文学を封建主義文学と呼ぶならば、新文学は民主主義文学と呼んでもいい。

しかし、中国の新文学は、西欧の近代文学とはことなる。

西欧の近代文学は、簡単にいえば、西欧の各封建国家が資本主義国家に成長していった際に、自国の自然成長的な歴史と歩調をあわせて成長していった資本主義社会下の民主主義文学であり、それは個人の自由と平等を主張し、ふるい権威に反抗する。資本主義が帝国主義に発展し、社会内部の労資の対立を中心とする矛盾が顕著になってくると、西欧の近代文学は、この時もまた自国の自然成長的な歴史と歩調をあわせて、その内部から現代文学——プロレタリア文学をうんでいった。

一方の中国はどうか。西欧では資本主義が帝国主義に発展しつつあった際、中国はまだ封建国家であり、しかも西欧諸国の侵略をうけたのである。中国は自国の独立をたもつために、戦闘能力のひくい封建制度を捨てて、より強力な西欧の制度、文化その他一般を中国に移植せねばならなかった。中国はこのようにして、自国本来の

発展法則によってではなく、外部からの圧迫に抗するために、自国を西欧風の鋳型にはめて近代化しようとはかった。この近代化をはかった諸部門のうち、文学面に現われた動きが新文学運動の発端なのである。したがって、中国の新文学は、西欧の近代文学と同様に、国内において、個人の自由と平等を主張し、ふるい権威に反抗する。これが中国新文学の反封建性と称せられる一面の性質である。

だが、言葉はおなじように自由平等の主張であり、権威にたいする反抗であっても、これを国際的に用いた場合、西欧の強者・侵略者としてのそれと、中国の弱者・被侵略者としてのそれとでは、たいへんな相違がある。中国の国際的に用いる自由平等の主張、および権威にたいする反抗は、必然的に、資本主義国家や帝国主義者との闘争をともなう独立運動にむすびつく。この国家と民族の独立の要求を提出した点、これが中国新文学の性質の第二面で、これは侵略されたことのない西欧諸国の近代文学の持ちえぬ一面である。

中国の独立運動は、資本主義国家や帝国主義者に反対する。その点で資本主義国家や帝国主義者に反対するプロレタリア運動と共通面をもつ。しかし、独立運動は国家と民族の問題であるから、これを階級闘争を主眼とするプロレタリア運動と同一視することはできない。と言って、独立運動をプロレタリア運動と峻別することもできない。なぜなら、資本主義国家もしくは帝国主義者が、ある土地を搾取源として確保しようと考えた場合、かれらはつねにその土地の人民をツンボ桟敷において、その土地のボスと取引きするのが常套手段だからである。そのとき、その土地のボスは、自己の利潤をあげるために、その支配下の土地と人民を売る。したがって、独立運動は、資本主義国家や帝国主義者に反対すると同時に、それらと結びつくボスにも反対しないかぎり、目的は達成されない。そこで、この国際的な問題は、同時に国内的な階級問題にもなるのである。独立運動と切りはな

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

すことのできないプロレタリア運動の文学的表現、――これが中国新文学の性質の第三の面である。

以上の中国新文学のきわだった性質を見ればわかるが、中国の新文学は、いわゆる近代文学、いわゆる現代文学とは性質を異にする「新文学」で、おそらくは今後のアジアの各地に、またアフリカに、南米に、誕生するであろう文学も、これに似たものであろうと考えられる。

私がこの本に書こうとしているものは、しかし、この中国新文学の分析ではなくて、そのような文学がどのような経過をたどって生れてきたかである。問題が「経過」であるから、便宜的に、またこの方が読者に親しみをおぼえさせるだろうと考えて、主要な作家をからみ合せて、流れに断層がないようにと考えた。

ところで、「経過」とか「流れ」とか言う場合、いちばん問題になるのが、とだえることのない「流れ」を無理に区切る時代区分の問題である。誰に河の上流と中流と下流を、どこからどこまでと、一寸の狂いもなく区切ることができようか。中国新文学史を時代区分する場合、一応の目安になるのが、国外からの大きな侵略、それにともなう国内の変革である。なぜなら、中国新文学は、その性質上、そのような時に新発展をとげるからである。そのような目安にしたがって中国新文学史を区分すると、だいたいつぎのようになる。

前　史――アヘン戦争から五・四運動まで(一八四〇～一九一九)。

第一期――五・四運動から武漢政府成立まで(一九一九～二七)。

第二期――南京政府の成立から日中戦争勃発まで(一九二八～三七)。

第三期――日中戦争の勃発から日本の降伏まで(一九三七～四五)。

第四期――日本の降伏から中華人民共和国の成立まで(一九四五～四九)。

第五期――中華人民共和国の成立以後(一九四九～　)。

前史は封建国家の崩壊過程と西欧近代思想の進入過程である。第一期は西欧式の資本主義文化と社会主義文化を無差別に導入した時期であり、両者の混合体である「新文化」を救国の妙薬と考えた小資産階級が、新文化運動を推進し、その運動が上昇線をたどった時期である。第二期は、新文化運動の分裂期である。封建文化と資本主義文化の混合体である半新文化が、蔣介石政府に援護されて優勢を示し、それに圧迫された社会主義文化が、毛沢東政府に守られて反抗した時期である。第三期は、第二期の半ばから露骨になった日本の侵略に対して、それまで分裂していた社会主義文化と半新文化が独立を保ちつつ合作して戦った時期である。このとき西欧風の社会主義文化は、独立運動と固く結びつき、中国的個性をもちはじめ、しだいに有力になっていった。一方の半新文化は、日本との闘争に無力であることが、しだいに暴露されていった。第四期は、第三期に合作していた二つの文化が抗争し、中国的社会主義文化が勝利をえてゆく過程である。第五期は、中国的社会主義文化が勝利を得てしだいに上昇線をたどる時期である。

これは完全な政治的な時代区分法である。だが、これを中国新文学史に照らしあわすと、第一期は新文学の発芽発展期であり、第二期は左翼作家連盟が奮闘した時期である。ただし、第三期と第四期は、たとえば王瑤(ワン・ヤオ)の『中国新文学史稿』によると、これが区切り目のちがう二期にわかれ、前半(一九三七～四二)は、新文学が民族解放の旗印のもとに戦った時期、後半(一九四二～四九)は、文学が工農兵の方向にむかった時期となっている。一九四二年が区切り目になっているのは、いうまでもなく、毛沢東が『文芸講話』を講演したこの一九四二年から、人民文学の製作が、少なくも中国共産党の統治地区では、中国新文学運動の目標となったからである。第五期は、中華

人民共和国の成立によって、人民文学の製作が中国新文学運動の正しい方向であると公認された時期である。してみると、第三、第四期をのぞいて、政治的時代区分法と文学的時代区分法は、だいたい一致していることがわかる。

一致している、と言っても、それは王瑤の区分法が正しいと仮定した上での話である。ならば、王瑤の区分法は正しいのか。私には多少の疑問がある。

たとえば、一九四二年から四五年にかけてであるが、中国共産党の統治地域では人民文学が芽ばえ成長していった。ただし中国国民党の統治地域ではそれは発生せず、両地域に共通した文学主張は抗日文学ではなかったかという点である。ここには中国新文学が多面性をもち、かわった政体下の地域ではかわった様相を示すということを考慮にいれねばならぬ問題がある。このほかに日本占領下における中国新文学の問題がある。この問題をつきつめてゆくと、これは序文の範囲を逸脱するから略すが、中国共産党の統治地域と中国国民党の統治地域で、異なった様相の文学がうまれた原因を政治的にさぐれば、抗日戦争下の国共の抗争という問題が出てくるはずである。

さて、私は中国新文学の多面性を前提とし、後進国の文学は、西欧の近代文学、現代文学から自国自民族の独立と民主化に必要な養分を吸収しつつ封建文化を破壊し、結局はその民族、国家の個性的な社会主義文学をうむであろう、という想定のもとにこの本を書いた。この本が満州事変直前で止っているのは、一にはページ数の関係、二には満州事変後の中国の政治と文学の動向については、読者もかなり承知しているであろうと想像するからであるが、そのほか、一日本人として、満州事変から日中戦争の終了までを、特別の眼で見たいからでもある。

蔣介石の北伐軍が北京にむかって進撃しているとき、日本の軍部は張作霖を爆殺した。日本はこのときから、軍閥を利用しての中国侵略の方策を捨て、また列強と共同しての中国侵略の方策を捨て、日本自国の武力の直接使用による中国侵略の方策をとった。日本のもくろみはほとんど成功するかに見えた。この祖国存亡の瀬戸際に立って、中国新文学は、戦闘的な、厭戦的な、逃避的な、享楽的な、敗戦的な、その他さまざまな文学をうんだ。それは今の日本人が読んで心うたれるものであり、また読んで反省せねばならぬものでもある。この本の末尾はその意味からいうと、これからいつか私が書かねばならぬと考えている『中国新文学運動史』第二分冊の序章をなすものである。

目　次

まえがき

一　郭沫若『波』――中国新文学への誘い……一

二　二つの流れ……四

1　アヘン戦争――すべてのはじまり……四

2　一つの流れ――太平天国運動　（付）胡適の家系……六

3　もう一つの流れ――洋務運動……一〇

4　もう一つの流れ（続）――維新運動　（付）張愛玲の家系……一三

三　西欧文化の吸収……一〇

梁啓超、林紓、厳復らとその後続者――郭沫若、胡適らについて

四　民族の発見……二八

1　魯迅の生いたち　（付）読書人階級について……二八

2　日本における魯迅――医学から文学へ……三四

3　革命の策源地――東京……三九

中国革命同盟会の誕生について

4　東京における魯迅……四四

魯迅の在日時代の論文と翻訳について

五　胎　動……五一

1　辛亥革命前後……五一

このころの胡適、章士釗、郭沫若、茅盾、丁玲、巴金、趙樹理、老舎

2　『新青年』の創刊——袁世凱の帝制復活運動とその波紋……五八

六　文学革命の提唱……六三

1　その発端——胡適、陳独秀および周作人の新文学論……六三

2　北京大学と『新青年』　(付)魯迅『狂人日記』……七四

3　五・四運動前後　(付)このころの丁玲……八五

4　五・四運動の影響——中国共産党の成立と国共合作　(付)胡適の革命からの離脱……九六

七　文学研究会と創造社……一〇八

1　文学研究会うまる……一〇八

胡適と陳独秀が去った後の文学界と新人の群　その機運に乗って文学研究会の成立

文学研究会の主旨と組織と刊行物

2　文学研究会関係者の活動……一二四

『学衡派』と文学研究会の論戦　茅盾の文学観　一九二二年までの新文学創作活動の概観

胡適、沈尹默、周作人、康白情、謝冰心、朱自清の詩　謝冰心の生いたちとその短篇小説

黄廬隠の短篇小説　短篇小説の傾向——落華生、葉紹鈞、王統照について　周作人の散文

丁西林の独幕劇

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

3　『吶喊』から『彷徨』へ……一四一
茅盾と魯迅の差　短篇集『吶喊』について――憧憬と暗黒とのもみ合い――「進化論」のとらえかた――進化をはばむものの発見　『彷徨』について――国を誤るもの――文化人の反省――西方文化のとらえかた
4　創造社の誕生……一五五
郭沫若を中心とした在日留学生の動向　『創造季刊』の発行とその傾向　創造社と文学研究会の対立　『創造週報』の発刊と初期創造社の文学理論　創造社の脱皮傾向『創造日』の発刊と章士釗の圧迫による創造社の崩壊

八　『語糸』――五・三〇――三・一八――北伐……一七〇
1　『語糸』の周辺……一七〇
章士釗と梁啓超を中心に見た民国初年以来の政党のうごき　英米留学出身文学者の進出と彼らの政界とのつながり　英米留学出身文学者の『晨報副刊』乗っとり
2　『語糸』と『現代評論』ならびに新月派……一七九
『語糸』の発刊　魯迅を排撃する英米派文学者と魯迅の反撃　魯迅文学の二大分類『野草』について　象徴詩の系譜
3　創造社のその後と国共合作のその後……一九三
離散後の郁達夫と成仿吾と郭沫若　孫文の死　五・三〇事件　その波間の郭沫若と茅盾第二次創造社の結成　蔣光慈について　郭沫若『革命と文学』
4　三・一八事件と魯迅……二〇四
五・三〇事件から三・一八事件へ　三・一八事件当時の魯迅とその周囲の青年

九　北京のたそがれ……二一四

北京を去った人――老舎、丁玲、胡也頻、沈従文について

十　国民革命の挫折……二三五

1　北伐軍の軍事行動とその内部抗争……二三五

北伐の背景　広東出発から武昌攻略まで　郭沫若『北伐途次』　武昌占領――南昌占領――武漢政府の出現　蔣介石と浙江財閥および帝国主義者との関係　北伐軍の上海占領と四・一二クーデター　馬日事変

2　分裂さらに分裂……二三九

謝冰瑩『従軍日記』　武漢政府の崩壊と南京政府への合流　中国共産党の根拠地建設

3　その頃の魯迅と茅盾……二四八

厦門における魯迅――『両地書』第二集　広東における魯迅――その講演について　いわゆる反動について　茅盾『蝕』　茅盾、魯迅、郭沫若の比較

十一　左翼作家連盟の成立……二六九

1　創造社と魯迅と茅盾……二六九

魯迅と郭沫若の合作について　創造社の内部事情――太陽社の結成――創造社と太陽社の性格　創造社と太陽社の魯迅茅盾攻撃――茅盾『姑蘇から東京へ』――小資産階級知識人の革命における地位について、およびそこから生れる文学について――馮雪峯『革命と知識階級』　知識階級の袋小路からの脱出

2　他の作家たち――革命へのあこがれ……二八一

葉紹鈞『倪煥之』――知識人と労農との間の断層　巴金『滅亡』――革命の実態と人道主義　丁玲『莎菲女士の日記』――欲望と革命の関係――ブルジョアかプロレタリアか　胡也頻『モスクワへ』――観念的革命文学　趙樹理――自分のために革命をもとめる人

3　新月派の登場から左翼作家連盟の成立まで……二九四
蔣介石の抬頭と中国共産党の劣勢　新月派の登場――革命文学の全面的否定　それに対する魯迅と郭沫若の反撃――広義革命文学派の成立　新月派の末流　蔣介石の文化弾圧　自由運動大同盟の結成とその宣言　左翼作家連盟の成立とその宣言　左連に対する魯迅の態度――知識人革命参加の姿勢方法など

十二　日本の侵入を前に……三〇五
左連の偏向について――李立三コース――世界的大恐慌　蔣介石の赤軍攻撃と左翼作家虐殺
それに対する左連のアピール――丁玲の左連参加――蔣介石と文化との敵対　次の段階への序章

あとがき

一　郭沫若『波』

――中国新文学への誘い――

郭沫若（クォ・メイルオ）につぎのような綱概をもつ『波』（一九四二）という作品があります。

武漢三鎮が陥落する五日前、一九三八年一〇月二三日の早朝、揚子江上には避難民を満載したボロ船がうかんでいた。船には日本から帰国したばかりらしい詰襟（つめえり）の学生服をきた若夫婦が、赤子をだいて乗っており、赤子は腹をすかして先刻から泣きつづけている。このとき、突然、日本軍の飛行機が上空にあらわれたので、船中は電気にふれたように、シーンとしずまり返った。赤子の泣き声だけが一きわかん高くひびいてくる。その恐しい沈黙に耐えかねたのだろうか、一人の兇暴な男がやおらとび出してきて、母親の手から赤子をうばい、それを揚子江に投げこんでしまう。母親は泣いた。だが父親――詰襟の学生服の男は、「泣くな、私たちは誰をうらむこともないんだ。ただ日本の鬼どもの暴虐をうらめ、そして私たち中国人の教育のないことをうらめ」と言って、沙市に上陸し、気の狂った妻をいたわりつつ、いずこともなく姿をけした。

四百字詰原稿用紙一〇枚にもみたない、ほんのスケッチ風の小品ですが、これを読んだとき、私たちは思わずぎくりとしました。私たちというのは日文学科に籍をおく数名の大学生と私で、私たちは「中国文学を読む会」というものをこしらえて、月に二～三回、中国文学についておしゃべりをしていたのです。一昨年（一九五五）のことで、そのころは、基地からとび立つ飛行機の爆音の下――砂川町で、日本人同士が衝突して血を流したあのニュース映画が、街角（まち）の常設館で上映されていました。

――中国の縮図だね！

――いや、日本の縮図だよ！

私たちはほっと溜息をつき、ふかい沈黙におちこんでしまいました。私たちはこの作品のなかに、かつての郭沫若の姿や、この作品をかいた当時の彼の決意などを見いだしたのです。

いかに決意をかためたとはいえ、たった一人のインテリが農村にはいって、何ができるでしょう。読者の一人びとりに決意を呼びかけたところで、その決意が結集されないかぎり、言論統制のきびしかった当時の重慶政府下では、読者をいたずらに暗い谷間におとしいれるだけだったかもしれません。こんな点に、当時の解放区の文学には見られぬ——したがって、中国の人民文学から多少とも学ぶところのあった私たちが、心しなければならない問題がふくまれております。またこの作品では、船に乗った避難民が、「抗戦建国の前途、武漢三鎮の運命、日賊の暴行、わが軍の奮戦、国際のよせる同情、さては米、味噌、醤油、離合悲喜の類にいたるまで」をかたり合ったことになっておりますが、この排列方法は、ごった返す避難民の様相とは、おそらくかけ離れたものにちがいありません。簡単にいうと、この『波』という作品は、おそろしくあまい作品なのです。けれども、あまいからといって、この作品を捨てることはできませんでした。なぜなら、そのあまさの故に、困難な環境をほとんど無視して、堂々と巨歩をすすめる郭沫若の偉大な姿を発見したからです。とすれば、郭沫若のあまさは、百千錬磨をへて、なおも屈せぬ強さでなければなりません。これこそロマンチックな精神というべきではないでしょうか。「人びとはなぜ砂川を問題にしないで職業野球を問題にするのだろう」と、日本の暗さを他人のせいにして、自分の精神の萎縮に気づかなかった私たちは、郭沫若におどろき、心のふるえをおさえられませんでした。

この作品が書かれた当時の中国人の敵は、むろん日本軍でした。しかし無知で乱暴な男は、爆音におののくと、発作的に、罪もない赤子を、泣き声がカンにさわるという理由だけで揚子江に投げこみ、かたわらの念仏婆さん

は、その行動に同調しております。ここには、小さなエゴの罪悪があますところなく暴露されております。しかし乱暴な男も念仏婆さんも、赤子を殺したことによって、恐怖から脱出することはできませんでした。ここにおそろしい真実があります。

――こんな作品は日本にはない。

学生は、最後に屈辱的な感情をこめて、こう言いました。読書範囲のせまい私たちですから、こうあっさりと断言はできません。が、当時このような作品は、私たちの目にはいりませんでした。昨年（一九五六）からはだいぶ様子がちがってきましたが――

日本にこういう作品がなくて中国にあること。――この差異のなかに、日本と中国の過去の歴史の相違を感じとることができます。中国はアヘン戦争以来、つねに日本をふくむ外国の侵略をうけ、つねに国土のある部分を強力な日本をふくむ外国軍隊に占領されておりました。その事実を中心にして、国民の間にはさまざまな反応がおこり、それら経験のつみかさなりが、揚子江の早朝という抒情的なスケッチのなかに、侵略者と被侵略者、侵略されて反抗する者、その反抗をおさえようとする者、逃げまどって何かにすがりつこうとする者、その他さまざまな群像をからみ合わせる郭沫若の目をきたえたのではないでしょうか。

中国はかつて悲惨でした。だから最近のものを除いて、中国文学にはうめき声がみちております。日本には中国のこの種の悲惨事はありませんでした。だから現に砂川のような悲惨事にぶつかりながらも、関心をもつ者は少なく、それを作品に再現する者も少ない。私は日本人に、日本の現状を知る鏡として中国文学をおすすめしたい。この本が、中国文学に多少でも関心をもつ人びとの手引きとなれば幸いだと思います。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com